

# こう入道殿御返事

文永一二年四月一二日 五四歳

人の御心は定めなきものなれば、うつる心さだめなし。さ<sup>佐渡</sup>どの国に候ひし時、御信用ありしだにもふしぎ<sup>不思議</sup>にをぼへ候ひしに、これまで入道殿をつかわされし御心ざし、又国もへだたり年月もかさなり候へば、たゆむ御心もやとうたがい候に、いよいよいろをあらわし、こう<sup>功</sup>をつませ給ふ事、但一生二生の事にはあらざるか。此の法華経は信じがたければ、仏、人の子となり、父母となり、めとなりなどしてこそ信ぜさせ給ふなれ。しかるに御子<sup>みこ</sup>もを<sup>在</sup>はせず、但を<sup>親</sup>やばかりなり。其中衆生<sup>ごちゆうしゆじゆうしつぜ</sup>悉是吾子の経文のごとくならば、教主釈尊は入道殿・尼御前の慈父ぞかし。日蓮は又御子にてあるべかりけるが、しばらく日本国の人をたすけん<sup>なかづくに</sup>と中国に候か。宿善<sup>尊</sup>たうとく候。又蒙古国の日本にみだれ入る時はこれへ御<sup>渡</sup>わたりあるべし。又子息なき人なれば御<sup>齢</sup>としの<sup>末</sup>すへには、これへとをぼしめすべし。いづくも定めなし。仏になる事こそ<sup>終</sup>つ<sup>栖</sup>みの<sup>思</sup>すみかにては候へとをもひ切らせ給ふべし。恐々謹言。

卯月十二日

日 蓮 花 押

国<sup>府</sup>のこうの入道殿御返事

あまのりのかみぶくろ二、わかめ十<sup>帖</sup>でう、こものかみぶくろ一、たこひとかしら。